

## 授業探訪

言語系科目・自由科目「入門インドネシア語」

## 全学共通科目としてのインドネシア語入門クラス

全学共通カリキュラム運営センター兼任講師 竹下 愛

## インドネシア語入門を担当して

今年度4月から、立教大学の全学共通科目として開講されている「インドネシア語入門」を担当している。インドネシア語は昨年度に新規開講された比較的新しい科目であり、私は2年目となる今年度から、このバトンを引き継ぐかたちで授業を任されることになった。春学期は池袋キャンパス、秋学期は新座キャンパスで、いずれも全学共通科目として同じ入門科目を開講している。全学共通科目としてのインドネシア語入門には、学部や学科の枠を越えて多様な学生が集まってくる。春学期の池袋キャンパスでは、定員40名の授業に対して50名を超える履修希望があったと聞き、その人気ぶりにまず驚かされた。抽選の結果、定員の40名が登録されることになったが、その内訳は文学部や異文化コミュニケーション学部、経済学部、社会学部といった文系のほか、理学部の学生も含む、文字どおり「全学共通」の顔ぶれであった。初回授業の日、教室いっぱいには並んだ学生たちの表情からは、「はじめて学ぶ言語」への期待と、「普段は交わることの少ない他学部の学生と同じ教室にいる」という新鮮な緊張が同時に伝わってきた。

## グループ活動を中心とした授業設計の工夫

40人規模のクラスでは、ただ講義形式で説明を続けるだけでは、どうしても受け身の学びに傾きがちである。そこで私は、できるだけ早い段階で学生同士が顔と名前を覚え、安心して声を出せる雰囲気をつくることを授業設計の出発点に置いた。具体的には、初回授業でくじ引きを用い、クラス全体をランダムに5つのグループに分けることから始めた。こうして組まれたグループのメンバー同士は、学部も学年もばらばらで、ほとんどが初対面である。このグループで最初にお願ひした活動が、「グループ名を考える」という課題である。自己紹介を兼ねた話し合いのなかで、「持っている携帯電話の機種が偶然同じだった」「好きな飲料水のブランドが共通していた」「出身地が集中している県名があった」など、それぞれのグループなりの共通点を見つけ、そこからユニークなグループ名を作ってもらった。中には、インドネシア語の授業らしく、スマートフォンの機種名にインドネシア語の語彙を組み合わせた名前を考えるグループもあった。こうしたささやかな作業を通じて、最初はぎこちなかった教室の空気が次第にほぐれ、笑い

声も混じるようになった。

授業は、教科書とは別に毎回配布するプリントを用い、ほぼ1回につき1課のペースで進めた。インドネシア語はアルファベット表記で、動詞の活用なども少ないことから「やさしい言語」と紹介されることも多い。しかし、実際に学び始めてみると、「あなた」に相当する語が場面によって使い分けられることや、「お父さん」「お母さん」を意味する bapak / ibu が、年長者への敬称としても広く用いられることなど、文法だけでは捉えきれない文化的な含みが多くある。そのため授業では、まず発音や基本文の練習をしっかりと行いつつ40人という人数の多さを逆に活かしたいと考え、授業の最後には毎回、グループごとに短いインドネシア語の文を1本作ってもらう時間を設けている。その日に学んだ文法項目や表現を必ず一つ以上含めることだけを条件とし、内容は自由である。学生たちは、日常のささいな出来事を題材にしたり、グループ内の内輪ネタを織り込んだりしながら、相談して文を作っていく。できあがった文は各グループの代表者が板書し、その後、作成したグループ以外の学生全員に音読してもらう。そして、その意味が何であるかを、グループで話し合いながら推測してもらうのである。このとき、分からない単語が含まれていても一人で抱え込む必要はない。グループメンバーと相談しながら「たぶんこういう意味ではないか」と当たりをつけていくなかで、自分がすでに知っている語彙や文型に気づき直したり、新しい表現が印象深く記憶に残ったりする。最後に、推測された意味が、文を書いた側の意図とどの程度一致しているかを全員で確認する。ときには、書いた側の文そのものに文法的な誤りが含まれているために、どう読んでも正しく意味が取れない、という場面もある。しかし、その「ずれ」を全員で共有し、どの部分をどう直せば伝わる文になるのかを考えるプロセスこそが、入門レベルの授業では貴重な学びの機会になっていると感じている。

## 秋学期・新座キャンパスの少人数クラスと授業のダイナミクス

秋学期の新座キャンパスでは、同じ入門インドネシア語を11名の学生とともに学んでいる。池袋の40名と比べると、人数は一気に四分の一以下となるが、そのぶん一人ひとりの顔がよく見える密度の高いクラスになった。少人数ゆえ、発音練習やロールプレイでは、それぞれの声の出し方や表情の変化まで手に取るように伝わってくる。教員と学生のやり取りも、池袋とはまた違ったテンポとリズムを持つようになった。同じ入門編でも、人数の違いによって授業のダイナミクスは大きく変わる。池袋では、「大人数のなかでいかに協働的な学びの場を作るか」が常に意識される一方、新座では、「一人ひとりの理解度やつまづきをどこまで丁寧に拾い上げられるか」が課題となる。いずれのキャンパスでも、学生たちはそれぞれのペースで確実に力を伸ばしており、同じシラバスに基づきつつも、二つの教室が互いに補い合うように、私自身の授業観を揺さぶってくれている。

## リアクションペーパーに見る学生の関心の広がり

授業の最後には、どちらのキャンパスでも必ずリアクションペーパーを書いてもらっている。そこには、文法事項に関する具体的な質問だけでなく、インドネシアの観光地や食文化、宗教、歴史、社会状況に関する多様な関心が書き込まれている。特に、世界最大の人口を有するイスラームについての疑問は多く、「断食月の生活リズムはどのように変化するのか」「ハラールという考え方は日常のどんな場面で意識されるのか」といった問いが寄せられる。また、「インドネシアで日本のアニメや音楽、ファッションはどのように受け止められているのか」といった、日本文化の受容をめぐる質問も目立つ。こうした声に応えるべく、授業の冒頭には毎回、学生からの質問に答える時間を設け、短い映像や写真も交えながら、インドネシア社会のさまざまな側面を紹介するようにしている。

## 受講動機が多様性

春学期の最初の授業では、「なぜインドネシア語を履修しようと思ったのか」を簡単なアンケートで尋ねた。「東南アジアを旅行してみたいから」「アジアの国際関係に興味があるから」といった理由のほか、「英語以外の言語を一から学んでみたかった」「高校時代にインドネシア出身の同級生がいて、少し気になっていた」など、動機は実にさまざまである。必ずしも明確な将来像や専門的関心があって履修しているわけではないからこそ、授業のなかで出会うささやかなエピソードや映像、ゲストとの対話が、「自分とインドネシア」との距離感を静かに変えていくきっかけになるのだと感じている。

## 全学共通科目としての語学教育の意義

全学共通科目としての外国語科目には、単に語学力を身につけるだけでなく、学生が自分の専門領域の外側に広がる世界に触れるための「余白」としての役割も期待されているのではないだろうか。インドネシア語の教室には、国際関係や地域研究を志す学生だけでなく、将来は企業で研究開発に携わりたいという理系の学生や、福祉や教育の現場に関心を持つ学生も座っている。彼らが、授業を通してインドネシアの社会や文化に具体的なイメージを持ち、「自分の専門とどこかでつながるかもしれない」と感じることができれば、それは全学共通科目ならではの広がりであり、リベラルアーツ教育の一端を担うものと言えるだろう。

私自身、これまでインドネシアの現代文化や若者のライフスタイルを研究してきた立場から、授業の中でも折に触れて、映像や音楽といった身近なメディアを手がかりに、インドネシア社会の姿を紹介するようにしている。学生の反応を見ると、「遠い国の話」だと思っていたものが、「自分と同年代の若者が生きている場所」として急に立

体的に感じられる瞬間があるようだ。その瞬間に立ち会えることは、教員として大きな喜びであり、同時に、自分自身の研究をあらためて社会に開いていく作業でもあると感じている。春学期の最終回には、7月に学内で行われた留学生によるお国紹介イベントで知り合ったインドネシアからの留学生5名を、ゲストとして授業に招いた。日本での生活の印象や、インドネシアの学校制度、家族との関係、休日の過ごし方など、学生たちは、これまで授業で学んできた挨拶や簡単な表現を試しながら質問したり、留学生の日本語での説明をきっかけにさらに興味を広げたりしていた。「インドネシア語をもっと話してみたくなった」「インドネシアに行ってみたいという気持ちが強くなった」といった感想が多く寄せられた。

## 日本とインドネシアの将来に向けて

こうした「生きた交流の場」を、今後も積極的に設けていきたいと考えている。日本とインドネシアのあいだでは、観光や経済だけでなく、技能実習生や留学生、ビジネスパーソンなど、さまざまなレベルで人の往来が増えている。文系か理系か、どの専門に進むかにかかわらず、学生たちが将来、こうした場面でインドネシアの人びとと出会い、ともに働いたり学んだりする可能性は決して小さくない。そのときに、相手の言語や文化に少しでも触れた経験があるかどうかは、コミュニケーションの姿勢に大きな違いをもたらすはずである。インドネシア語入門の授業は、あくまでも基礎の基礎を学ぶ小さな一歩にすぎない。しかし、その一歩が、学生にとって「日本語と英語だけではない世界」の存在に気づくきっかけとなり、アジアの隣国との関係を自分の問題として考える入り口となれば、担当教員としてこれほど嬉しいことはない。

たけした あい